

# ここに帰る

和田重正に学ぶ会

題字 和田重正

ここに帰る

第八十五号

令和七年四月一日発行

## 目次

|   |                      |    |
|---|----------------------|----|
| 『あしかび』 第十一号<br>合同林間学校報告<br>文化の波   | 和田重正                 | 2  |
| 『あしかび』 第十二号<br>飛田徳洲老の教訓<br>石原先生のお話<br>垢抜けした家庭                             | 和田重正                 | 7  |
| 『あしかび』 第十三号<br>よい人間   | 和田重正                 | 5  |
| 『あしかび』 第十四号<br>はじめ塾とは何だろう<br>このごろ思うこと<br>十字町便り                            | 和田重正<br>中山信作<br>中里史子 | 15 |
| 『あしかび』 第十五号<br>白と黒<br>これでいいんだ   | 和田重正                 | 13 |
| 『あしかび』 第十六号<br>美しい心<br>盤珪さんの「不生」<br>まみず 昭和四十九年三月号<br>白い杖 見える<br>くも 収穫を問わず | 和田重正                 | 41 |
| 西湘まみず会通信 人生観への道   | 和田重正                 | 44 |
| 後記  | 和田重正                 | 41 |

表紙写真 河津桜

静岡県南伊豆町青野川  
撮影 大塚柳之





11

発行人 はじめ塾 和田重正  
印刷人 大畑 喜美子  
昭和三十五年八月十五日

## 合同林間学校報告

八月三日から九日までの一週間、例年の通り久野の禪寺東泉院に合宿して林間学校を設けた。

今年は参加人員が今までになく多く、且つ参加者に小学生が数名混じっているので、趣旨を徹底させるのに困難を感じるだろうと惧れていたが、実際には予想に反して、今年の合宿は大へん順調であった。

それは一つには三人の先輩指導員が全員を三分して各々グループを担当してよく面倒をみてくれたことにもよるが、やはり根本は、参加者各自が、この合宿の趣旨をよく理解して、

○ ケチな根性を出さず、

○ 一つの行動から次の行動への移り替わりにけじめをつけて、

集団生活を楽しくすることに努力した結果だと思つ。

このようみなみんなの心構えがハッキリとあらわれ、私をこの上なく感激させたのは、生煮えのごはんを食へさせられたときである。

四日目の昼食だったと思つ。太鼓の音を待ちかねる思いで集まってきた少年たちは、勢よく、

「いただきます」

と叫んで箸を動かしたはじめたと思つと、いつもの活気溢れる気配とは全く異なつて、急に全体のフンイキがシーンとなつてしまつたのに私は気づいた。おかしいと思ひながら自分も箸をとつてみると驚いた。

すごい生煮えなのである。とうてい嚙むことも呑み込むこともできない程度である。私は「困つた」と思つて全員を見渡した。みんなは黙々としておかずを食へ、ごはんをつついていゝる。そのうち、一人の子が「シンありだ」と一言言った。ハツとして私は全員を注意深く見廻した。誰もそれに応ずるものがない。すると「シンありだ」とつぶやいた子も「そうか？」と気づいたのか二言は言わず黙々つつつき

はじめた。当番の班の者を見ると、いかにも当惑しきったというふうな恰好で下を向いてモグモグやっている。私はそのとき腹の底で「ああ、いい子たちだなあ」と叫んで、胸の熱くなるのを禁ずることができなかつた。

子どもにはむずかしいお説教をしなくても、自分が当番をやってみて、自分の作ったごはんをみんなが無事に食べ終わってくれるまでのその不安な気持ちを経験していさえすれば、他の者が失敗したときに、どうすればよいかを正しく知っているものである。

「しまった」と思つて当惑しきっている当番を「シンありだ、シンありだ」と騒ぐことによつて、どんな気持ちに追い込むかをよく弁わきまえているのである。

何しろ、経験のない少年たちが三升とか四升のごはんをかまどで炊くのだから、毎年一回ぐらいはこんなことが起こる。勢よく燃えなないと出来そこないになると教えられるので、少年たちはむやみに薪を押し込むので、かまどの中心部がくすぶつて燃えなくなる。それですますますあせつて薪をギュウギュウ

押し込み、うちわでカ一杯あおぐので、かまどの前面だけは炎をあげる。こうして惨たんたる奮闘の結果が大いしんありになるらしい。そしてそのとき  
の態度は年によって異なるけれど、今年のように全員が立派にやつてのけたことは一度もなかつた。大いには後々までも苦々しい思い出となるようなまづい事件にしてしまふのが普通であつた。

後でよく調べてみると、私のところは一番はじめにつけたので釜の中心の上かわをすくつたことになり、そのため生煮えの一番ひどいところが当たつていたらしく、みんなのところは、それほどでもなかつたらしいが、それでも多くの者が後で言うのだから、かなり生煮えだつたに違いない。しかし胃腸に障るほどのことではなかつたことを確認して一安心したことだつた。

それからいつもの年より際立つて良かったことは、朝の起き方である。

五時半の太鼓と同時に全員実に気持ちよく飛び起き

た。すぐにふとんを整理し、洗顔に出かけて行く。本当に誰も彼も例外なしに実によくやってくれた。

「グウ、グウ、グ」まできたとき太鼓が鳴ると、あとのウーはやめにして飛び起きた。

大ていの年は三日目、四日目になると、太鼓に耳をふさいで毛布にくるまってしまったり、起きてもふとんの上に坐り込んでボーツとしていたりするものが何人か出るのが普通なのだが、今年はそんなタランだものは一人もいなかった。この一事からでも合宿全体のさわやかなフンイキが推し知られると思う。勉強も割合よくやれたのは当然だろう。今年はいつもの年とくらべて行事が少なかった。ピンポン台はないし、学校の運動場で野球をすることもできなかった。古墳見学も植物採集もする機会がなかった。お化け大会もやらなかった。だから割合平凡な日常だったと思うが、それでも楽しさは、必ずしもいつもの賑やかな催し事のある年より少なかったとは言えないと思う。きっと今年の合宿は味のいい楽しさに満ちていたのではないかと思う。行事の少な

いでレクリエーションデーは大へん印象深い半日だった。

さて、この合宿がどのくらい有効であっただろうか。

「きれいなニンジンを食べるようになった」

「ナスが食べられるようになった」

「自分の食器を片付けるようになった」

「家の庭掃除をするようになった」

などと喜んで下さるお母さんが多い。それも結構なことだが、そんなことは私たちの手柄でも責任でもない。私たちが、この合宿に期待してそのために全力を傾けた最大のものは、幼児的な生活意識から順調に青年らしいそれに脱皮して行くための契機を与えることであり、副次的には、私が一人一人の性格を正しく理解するという点である。

これらの真の目的が、どれだけ達せられたかは今日、軽卒に言うことはできない。少なくとも十年の歳月の経過を待たなければウンともスーとも口を開くことは許されないだろう。いまはただ、祈るような気持ちで静かにふりかえっているだけである。

## 文化の波

うちにまた一つ文化の大波がなだれ込んできた。

高くめぐらされたしょう壁を乗り越えて、ついにテレビウェーブがわが家に入ってきたのである。

五、六万円もする物だから、これを買うお金もちろんなかったのだが、今までテレビを入れなかったのは単にそれだけの理由からではない。むしろ、もし必要なものならお金はどうかと思っていたが、子どもたちや大人たちにとって、利益<sup>プラス</sup>になるか損失<sup>マイナス</sup>になるかの判断に迷っていたのである。否、迷っていたのではなく、マイナスであるとはっきり思っていたから頑強にしょう壁を築いていたのである。

では今になってどうしてこの文明の尖兵の侵入を許したのだろうか。マイナスであるという考えを改めたのだろうか。そうではない。今でもそれは、マイナスであると思っている。一番いけないのは時間の浪費である。次に神経の損耗、ことに目を疲れさせ

る。これだけでも大へんなマイナスだが、それに加えて、内容のクダラなさによる精神的弊害も決して少なくはないと思う。

だから、多少為になる点はあったにしても、総体としてかなりなマイナスをつけなければならぬと思っている。

それでは、なぜ？

要するに文明の波がしょう壁を乗り越えて入ってきてしまったのである。では、何故、もつとしょう壁を高くして、抵抗しなかったのか。何故、乗り越えるままに放置したのか。——実はそこに問題があるのである。

文化——というより、文明と言った方が正しいかも知れないが、ともかく、科学の生んだ便利なものは大でい、その便利さと引換えに何かの犠牲を要求するものだ。汽車が発明されるとその便利さと引換えに、どこどこを親しく訪ね、国々、村々の人を味わいつつ旅する面白味は失われてしまった。自動車の発達は文明人の脚力を著しく弱くした。飛行

機に至っては、地図の上を飛んでいるようなものだろう。しかし、多くの文明の利器はその便利さが弊害損失を償って剩りあるほど大きいから、よほど臍曲<sup>へそま</sup>がりの閑人でない限り、今時東海道五十三次をわらじがけでテクつくようなことをする人はいない。

しかし、文明の所産必ずしもその通りではない。その極端なものは、原水爆の類であるが、それほどではなくとも、テレビも利害の比率において決して汽車・飛行機ほどの優美さはないと信ずる。つまり、こういう面からだけ考えると、テレビを家庭に入れることはよいとは思わない。

ところが、もう一步退いて考えてみると隣組二十戸のうちテレビのないのは四戸というほどに普及した今日では、テレビのあるのが常態で、テレビの無いのはかえって異常であるということになる。

人間は誰でも仙人にならない限り、文化的悪環境を免れることができないものだとしたら、その環境の中で生き抜く工夫をしなければ一人前にはなれないのではないだろうか。悪環境をことごとく遮断し

た宮殿の中で育った人がその素質がどんなに優れていても一人前の社会人になるとは考えられない。

われわれは、好んで悪環境を選び、その中に自らを置く必要はないけれども、世の中一般の常態と考えられる文化的悪環境は、強いてそれを避けようとすることもやはり間違いだであると考えるのである。

つまり、私は今テレビのあるのが一般家庭の常態になったと判断したので、テレビの流入を黙認したのである。これから、この文化的害悪をどう処理してゆくか、子どもたちをその害悪に対してどのような鍛練して行くかが問題である。

骨の折れることだが、そんな時代になったのだから仕様がなない。

たかがテレビ一台を入れるのに大げさなことだと笑われるかも知れないが、私にとっては実際大きな問題なのである。——子どもたちの教育に責任を持つ私にとっては、どうしても解決しなければならぬ、苦しい問題なのである。



12

発行人 はじめ塾 和田重正  
印刷人 大畑 喜美子  
昭和三十五年八月二十五日

日曜の話 八月二十一日

### 飛田穂洲老の教訓

甲子園の高校野球をテレビで見ていると、試合の合間に、飛田穂洲さんという老人に放送局の人がインタビューを試みる場所があった。飛田さんはずいぶん昔から有名な野球評論家だったから、もう相当の年だろうとは思っていましたが、テレビで見るとあまりにひどいおじいさんになっているので驚きました。どうしても七十五歳以上だろうと見受けられました。しかし、さすがに味のあることをポツリポツリ話しておられた。

甲子園の野球はじまって以来三十回（戦時中試合

がなかったから）無欠席だそうですね。それはこの人にとってはむしろ当然かも知れないが、放送局が、「昔と今と何か変わったと思われるところがありましたら……」

ときくと、老人は言下に答えた。

飛「ありません。同じです。人は代わっても、同じ年頃の少年たちのやることは同じです。ずるさやきたなきのないひたむきなプレーは今も昔も変わりません」

飛「もし、大学やプロに遠く及ばないこの少年たちの野球が、技術的になってあの純真さがなくなったら、誰も見にくる人はありません」

放「では三十回見ても飽きるということはないわけですね」

飛「そうですね。誇りと希望に満ち満ちた楽しさ、戦いすべてが終わって、六甲山に夕陽の傾く頃の閉会式の淋しき、これは毎年同じです」  
と静かに答えていました。

一生を野球にかけてきた老人の言として心に沁み

るものがある。——まだまだ自分にはこんな美しい心境にはなれない、とそれを聞きながら私は思ったことでした。

それから静岡高校の監督が呼ばれてこられた。この人は昔、飛田さんから教えを受けたことがあるのだそうです。

放「どんなことを教えられましたか」

監「精神的な教えを受けました」

飛「今の選手は監督によりかかっている。それは監督にも責任があるのだから、みんな監督によって上手になろうとか、監督によってうまくい試合をしようと考えている。これは間違いである。それでは本当に強くはならない。本当に技術も上達し、試合に強くなるのには、自分の工夫で自分の心を練ることが第一だ」

飛田さんはこれだけを実にハッキリと熱をこめて言い切りました。この最後の言葉を言うときには、老人の目は神々しいほどに光を放ったように思われました。——私は、それほどに感動を受けたのです。

「野球でもそうなのか」と。

何事にも自分の力で、自分の工夫で処理して行くという態度ほど大切なものはない。私は教育の根本はそこに置かれなければならないと常々思っています。外面どんなに厳格に躰けられているように見えても、肝心のところで甘やかされている子は、下手な監督に育てられた選手と同じで、自分の工夫というものを知らない。勉強でも何でも、すべて親や先生など大人の指図を受けなければできない。そしてエラーをやったときには、そういう依頼心の強い子は必ず何か自分以外の人または物事に責任を転嫁しようとするものです。自然そういう場合には、言い訳としてウソと思わぬウソを言うことにもなる。しかも本人はそういう自分の幼なさに気づかぬことが多いから厄介なのです。

しかし、このような依頼性の強過ぎる性格を矯正し得る最後の機会は中学時代です。この時期を逸したら、その人の一生は不平不満に満たされた実に気の毒なものになってしまいうでしょう。私はそういう



実例を数多く知っています。

なにしろ、ものごとを自分で工夫し、自分で切り開いて行こうとする心構えさえできれば、あとのよいことはすべてそこから出てくる。

選手（子どもたち）も監督（親や教師など）もよくよく心すべきことだ。

## 石原先生のお話

八月二十一日、はじめ塾父母の会と在家仏教会との共催で、『十代の危機』の著者石原登先生の講演会を開きました。

お話の内容は書籍『十代の危機』とだいたい同じでしたが、読むのと聞くのとは大へんな違いで、この本を何回も読んでいる私でも非常な新たな感動をもって聴くことができました。当日お聴きになったお母さん方はどなたもきっと、何かしらお心にこたえるものがあつたに違いないと思っています。です

からこのお話はぜひ「父母の会」の全員に聴いていただきたかったと思いますが、テープにとっておくこともできなかったのは返すがえすも残念でした。

お話の中で、感動を受けた点はたくさんありますが、その中の一つだけを記しておきます。

「たとえば、子どもに明朝七時に起きなければならぬが『どうだ起きるか』ときいてみて、もし子どもが、『はい、起きます』と一度言ったら、起きるか起きないかの責任は、いっさい子どもに移してしまわなければならない。七時になっても起きないで、何かに差支えが起こったときには、その責任を徹底的に追求する。このようにしなければならぬ。そうでなく、翌朝になって『七時になったよ、おくれますよ、さあ起きなさい』などとお節介をやっていたら、いつまでも、自分の責任で行動を決するといふ、いわゆる自主性というものが育たない。これは、その子の一生を大へん不幸なものにしてしまうだろう」と。私は全く同感なのです。

よく躰けられている子の中には、生活上の大事な

事柄（子どもにとっては勉強がその一つです）に対してまるで自主性を持たない子が時々あるものです。そういう子の親はほとんど例外なくこう言います。

「先生、うちの子は、これをせよ、あれをせよ、とハッキリときびしく指図をして下されば必ず実行しますから、どうぞ、そうして下さい」……これは一体何を求めているのでしょうか。

なるほど、われわれ親や先生というものは、こうせよ、ああせよ、と指図をし、それが実行できるように条件をととのえてやらなければなりません。しかし、それをしないほど急慢な人はあまりないでしょう。

そうだとすれば、その人たちは何かそれ以上の助けを求めているのではないのでしょうか。

それは間違いだと思います。一旦指図を与え、子どもが承知した以上、あとは子ども自身の責任としてまかせてしまわなければなりません。子どもがもしそれ以上の何かを期待して大人の下してくれる手を待っているようだったら、致命的な結果を招かな

い限り、突き離して見ていなければならぬと思います。そしてその結果、まずいことが起こって、子どもが困難に陥ったり、恥をかいったり、いろいろな思いをしてもよいのです。否、むしろ、そうしたところへなるべく早く追い詰めてやらなければなりません。

いかにも意地悪く、無慈悲なようですが、その方がその場その場に助け舟を出してゴマ化してやるよりずっと正しい道だと信じています。また、指導者（親や先生）としては手をかして子どもへの負担を軽くし、その場その場の問題を片付けて行く方がどれだけ面倒でないか知れません。しかし、本当に子どもの将来を考えたら、どんなにシンが疲れてもそんなことをせずに、問題を自ら解決して行くこうとする根性を育ててやらなければならないと思います。こんな頑固な考えは古いのでしょうか。

明治生まれの私は、もっと先輩の石原先生と、この点で完全に意見が一致しているような気がします。

## 垢抜けした家庭

自分のぐるりの、いろいろの家庭の生活を見てみると、それから受ける感じは千差万別である。

暗い感じ、明るい感じ、ケチな感じ、のびやかな感じ、温かい感じ、冷たい感じ、チクチク刺す感じ、フワリと柔かい感じ、濁った感じ、清潔な感じ、ガサガサと落着かない感じ、落着いた感じ、こんな粗末なことばでは言い表わせない複雑な色合いや肌ざわりを感じさせられるものだ。

そういう家庭のいろいろな感じの中で、私が一番好きなのは垢抜けした感じである。

人柄でも垢抜けのした人柄というものがある。それと同じで、ある家庭の生活からは、何か垢抜けしたのを感じさせられることがある。では垢抜けした感じとは何かと問われると、容易に答えられない。その感じの本質は、私にはまだ捉えられていない。でも次の二つの事柄はこの感じを生ずるために重要

な役割を果たすのではないかと考えている。

一、その家庭全体に通じた何か目的とか信条といったようなものがあること。

二、その目的や信条は次元の高いものであること。  
下宿屋や旅館のように、何の共通のものも持たない人々がただ寄合って生きているだけの家庭から、垢抜けした感じ、などという、スッキリと気の利いたものが出てくるはずはない。何かしら筋の通ったものがその家庭全体の生活の底に流れていて、家族の各人は思い思いの生活をしていながら、いつもその中心の流れからは離れないのでなければならぬと思う。

そして中心の流れとなるべきものは、相当に次元の高いものでなければ駄目だと思つ。

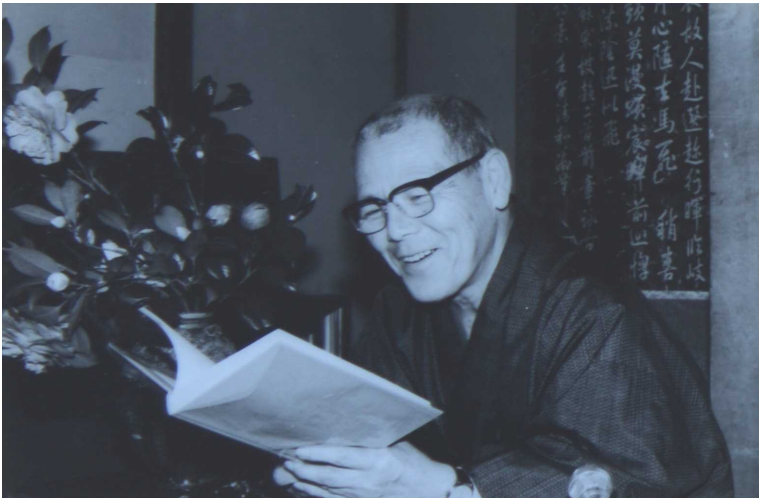
財産や地位や権勢や意地などといった低い次元のものによって貫かれた家庭から垢抜けした感じが出ないのはもちろん、昔よくあった、今でもたまにはあるようだが、没落した一家を再興するために家族全員が自己の欲望を犠牲にして奮励努力するといっ

た古い美談の程度の生活からも決して、垢抜け、というスッキリした感じは出てこないようだ。やはり、もっと我執を離れたもの、自分や自分の一家の維持や繁栄を顧みずに追求する、もう少し高い次元のものでなければならぬと思う。

さて、こう言ってくると、私が「高い次元のもの」というのは、何か宗教的なものを指しているように思われるであろう。あるいはその通りであるかも知れない。否、半分はその通りなのである。

しかし、教理に拘泥し、教義に執われ、教派、宗派に立て籠るようなミミッチイ宗教は人々の生活を垢抜けさせるのには何の役にも立たない。もっともっと純粹な、人の心の奥底に流れる真実な、宗教以前の情熱とでも言うようなものに直接つながるものを宗教的なものと呼ぶことが許されるなら、そのようなものが家庭の中心を流れているとき、われわれはそこに垢抜けした生活を感じるのではなからうかと想像している。私の家庭の現実には、遺憾ながらそれとは程遠いのは勿論であるけれども。

## ある日の一心寮





1 3

発行人 はじめ塾 和田重正  
印刷人 大畑 喜美子  
昭和三十五年九月五日

## よい人間

○ よい仲間ほどいいものはない。人生を愉しいものにし、正しいものにし、慰安となり励ましとなる。

○ 彼と我と、我と汝と、何が違ってもいい。年齢、性、階級、貧富、信仰、思想、趣味、人種……何が違っても、よい仲間となる妨げにはならない。ただ、誠意を信じ、好意を信じ合えるならば、互いによりい仲間であるに十分である。

○ 憎み、憎まれ、恨み、恨まれることを極度に恐れ、誠意と好意をおやみに求める、神経の弱い人間は、よい仲間を持たなければ生きられないのだ。

○ 二人のよい仲間の間には、一つの樂園が建立される。三人のよい仲間の間にはその三倍の、四人の間には七倍の、五人の間には十一倍の樂園が出現する。五十人の間には三百二十五倍。百人では四千九百五十倍、二百人では一万九千七百倍となる。その辺になると大ききばかりでなく質も変わって、極楽の匂いさえしてこよう。

○ はじめ塾発生の動機はこの辺のところにあつたといえる。それからの三十年の歩みも要するに、更に一人のよい仲間を求めての旅であつたと言えよう。

○ 今、はじめ塾の仲間ほどのくらの大きさで、どんな相貌かたちをしているか、私にはわからない。銀河系宇宙の中にいるわれわれには、われわれのこの星雲の相貌を見ることができないのと同じである。

○ しかし、宇宙に漂う微かな粒子が、永劫の間に、

互いの牽引力で凝集し、だんだん天体が形成されるように、われわれのよき仲間もいつの間にか、何かの形を成してきたようである。

○ 自然発生的な、はじめ塾のよき仲間は、外側はモヤモヤとして卵の黄身と白身とほどには境がハッキリしない。

しかし、中心部はかなりの凝縮力があるとみえ、天体のそれと同じように濃度を増し、はじめ塾会館を作り出すほどのエネルギーを示した。

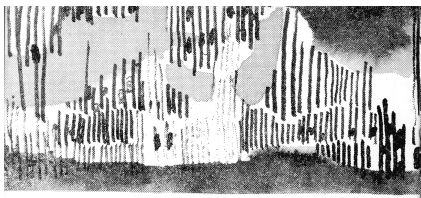
○ 天体でも、はじめ塾でも、こういう自然的な運動は加速度的に昂進するのが原則である。

○ 会館ができて、この一年を顧みるとき、その感が深い。

○ 渦巻は自らの凝集力によって内へ内へと巻き込む運動である。外へ働きかけるのではない。しかし、運動がはげしくなればそれだけ付近のものを吸いよせる力も大きくなる。

○ 無限の空間に音もなく、永劫えいごうという時間をかけて、創つくられている星雲のように、われわれのよき仲間も。

○ 秋の夜の空想は愉しい。





14

発行人 はじめ塾 和田重正  
印刷人 大畑 喜美子  
昭和三十五年九月十五日

日曜の話 九月十一日

## はじめ塾とは何だろっ

今日は、この塾の建物が出来て丁度満一年になります。これは三年計画で、百六十人の人が心のこもったお金を出し合って作ったものですから、この日を記念して毎年九月の第二日曜日に、はじめ塾の記念祭を行なうことにしたいと思います。今日はその第一回になるわけです。

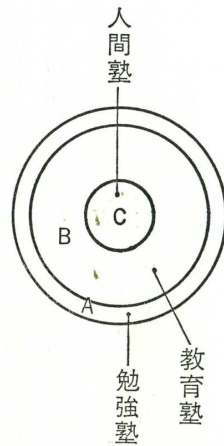
そこで、この前の「あしかび」で予告した通り、今朝は「はじめ塾とは何か」というお話をするつもりですが、実は数日前から、どういうふうに話そうかと考えてみると、なんと行ってよいか大へんおぼろかしいことだということがわかりました。なるほど、

昔からよく、はじめ塾の先輩たちが、よその人から「はじめ塾って何ですか」ときかれて、どう答えていいかわからず、大へん困ったという話をしていますが、まことにごもつともなことだと、今更の如くに思っています。私が答えに困るのですから、他の人々が困るのは当たり前です。どうして、はじめ塾とはそんなわかりにくいものになったのでしょうか。

普通、塾とかその他の団体は、まず目的があって、組織が作られるので、自然それはどんな団体であるかということは明らかになります。ところが、はじめ塾は、誰かが作ろうと思つて計画的に作ったのではなく、全く自然に発生し、生長してきたものですから、何もかも、はなはだ不明瞭なのです。この前の号に書いた通り、星雲のような輪廓のはっきりしない存在です。

では、はじめ塾は目的も理想もない正体不明のものかというところではありません。ただそれが単純な平面的なものでないために、一言にして言い表わすことができないだけです。

私はだんだん考えてみるうちに、はじめ塾というものは大体こんなものらしいということがわかってきました。



一番外側のAの部分は英語や数学を教えることを仕事とする「はじめ塾」です。はじめ塾を知ってからまだ日の浅い人や、長くても関心の薄い人は、ただこの部分だけを見て、「はじめ塾」とは近頃流行の勉強屋さんの一つだと簡単に思っていることでしょう。

次にその内側のBの部分は、教育についての理想を追求し、それを「人間のための教育」ということばで言い表わそうと試み、そして各人の、より深い幸福を実現するための活動を使命とする「はじめ塾」

です。このはじめ塾は、人間を金銭・物質・地位・権力・科学・芸術など、あらゆるものへの従属から解放し、人間の正しい自覚と自由を確立することを目的とするもので、教育の基本はそこになければならない。もしそれを外せば、知育も徳育も満足な形では行なわれないう主張を持っています。長年親しんで下さる方の多くは、はじめ塾のこの部分に一番大きく共鳴して下さっているのだと思います。

一番内側のCというのは、「よき仲間」を得て自己のまわりに建設された喜びの世界であります。この世界を少しでもハッキリと、少しでも大きく建設したいという止むに止まれぬ願いが、はじめ塾発生の原動力であります。だからこのCこそ、はじめ塾の本体だといってよいのでしょうか。ここには、疑いも警戒心も恐れも、そういう生命をすり減らすような心づかいはありません。ノビノビと自己をまる出しにし、したい放題、言いた放題のできる、いや何も言わなくても愉しい仲間の世界です。

世の中にはそれと全く反対の世界に生きている人



があります。子どもにはないでしょうが、大人の中には、内でも外でも疑いと警戒心と不安とに、いつも心を占領されて、目を三角にして生きている人が実際にあるもです。その人たちは、そうしなければ世の中というもには、生存していけないのだと信じています。その無智は全く気の毒なことですが、そういう生き方しか知らない人にとっては、四方八方自分のぐるりはみな敵で、敵中唯一人で勇ましく戦い抜いているとも思っているのでしょう。こういう人の住む悪夢の世界は即ち地獄といふところです。

「はじめ塾」はそういう地獄とは正反対のところですから、まあ、極楽といえはいいのでしょうか。

さて、この塾の建物を作るのに、資金を醸出きょうしゅつし、心からの声援を送って下さった方々は、少なくともBのはじめ塾を理解して下さっているのだと思います。それと同時に、恐らくCの部分にも、かなり大きな関心——共鳴して下さる方と疑問を抱いて下さる方とあるでしょうが——を寄せて下さっていることと  
思います。Cの部分、つまりよき仲間の作るはじめ

塾は、利害得失を離れた交わりの世界です。利害などというケチなことの埒外らちがいの世界です。ただお互いの善意と好意とまごころを信じて、自己のありのままをさらけ出して、安んじて、交わり結ぶ世界です。だから、このはじめ塾に一度触れた人は永く離れ去るといふことはありません。

しかし、利害を中に置かないから、別段食い入るような刺激の強い交わりにはなりません。結局、不即不離（つかず、はなれず）という関係で、いつまでもなつかしみ合うといふところです。そんな夢のような喜びが何になるんだらうと思う人があるかも知れないが、本当はその喜びの心から、あらゆるよいことが出てくるのです。

はじめ塾が発生してからもう三十年近くになりましたが、そこに坐っていらっしやるおばさんは今日の会に出席するために山形から出て来られたので、はじめ塾の最初の頃の人です。今日、十時半から集まって来る人たちの中には、その時分の人もあり、それから以後のいろいろの時代の人が混っています。

むろん、今年の春、高校に入ったばかりの若い人も来るでしょう。また長年の間「はじめ塾」に特別な好意を寄せ、常に物心両面の後援を続けて下さっている方々も来られるでしょう。それらの人々はみなBかCの「はじめ塾人」です。

みなさんは、どんな人々が集まって来るか、参考のために見て行くと思います。

今日は、だいぶ、おもしろい話をしましたが、そもそも「はじめ塾」というものは前に述べた三つの異なった性質と、働きを持ったもので、その三種が同時にしかも混ざり合って活動しているのですから、ちょっと正体がかまえていくわけです。みなさんは今日の話の内容は十分にはわからないかも知れませんが、今はわからなくても結構です。ただ「はじめ塾」とは何だろうか？ と疑問を持ってさえもらえば、今朝の話の目的は十分に達したものと思います。

中学時代にはわからなくても、十年たち、十五年たつて「あ、そっか」と気がついてくれる人もあるでしょう。今までにもそっかという人がたくさんあった

のですから、どうか「はじめ塾とは何だろう」と疑問を抱いてください。

話はこれで終わり。

では、なんその法をやりませう。

(注)

一、前に書いたA、B、Cの三つのはじめ塾は発生の順序から言えば、まずCがあつて、その具体化がBであり、Bのための方便としてAが構成されたわけです。本文の順序は説明のためにこれを逆に並べたのです。

二、はじめ塾の経営は現在「はじめ塾運営組合」という組合によって行なわれていますが、今日(十一日)その第二回通常総会が開かれることになっています。

理事長は私(和田)で、理事には間中博士、酒井忠治郎氏(県会議員)、岸達志氏、青木宏氏をお願ひしてあります。

組員の中には、私たちの最も敬愛する飯泉の  
峯大僧上、十字町の田中広志先生なども居られます。

このごろ思うこと

中山信作

「あしかび」を毎号お送りいただいて、いつも感じることは、そこにいつも偽りのない人生が描かれていることです。氣負いたったところもなければ、勇ましい言葉もありません。けれども、何か僕たち自身をふりかえって考えさせる力をもっています。「こんな子どもであってほしい」という「はじめ塾」の願いが、そのまま私たち大人の生き方にもじかに響いてくるということは、不思議なことです。よく言われているように、教育ということが単に子どもだけの問題ではなく、親子の問題であり、教師と子どもとの人間関係である限り、僕たちが「あしかび」から受ける感動は当然だといえましょう。といって

すべての教育について書かれている文章が常に「あしかび」からうけるあの底力のある感動と同じ感動を読者に与えるとは限りません。むしろ、そういう感動をうけることは滅多にないことです。これはどういうわけでしょうか。まず考えられる一つのこととは、今日の教育が科学的であろうと努めることによって、具体的な人間関係から離れてしまったということですが。

例えば、「社会改造のための教育」という考え方があります。子どものいろいろな問題は社会の矛盾から起こるのであって、社会を改造することによって、子どもの問題も解決されるだろうという巨視的な考え方です。ですから子どもを不幸にする社会の諸条件を科学的にさぐり、子どもを幸福にする条件を築きあげようと試みます。それは、社会科学としての教育学に成功したかどうかとは別に、教師や子どもを社会改造に従属させてしまったようです。子どもたちが社会についての「意見」をもつことはできて、現実人間としては未熟なままであるということこ

とは、教育としては失格であるように思われます。

この運動を支持する人々の善意にもかかわらず、そしてこの運動が、あの戦時中の軍国主義下の教育への抵抗として、歴史的な意義をもっていたにもかかわらず、この考え方に一つの混乱があるからではないかと考えます。

それは、子どもの「幸福の条件」と「幸福そのもの」とを混同しているのではないでしょうか。そしてそれが、科学の宿命ではないかと思われます。

科学は、幸福の条件について分析したり、批判することはできても、幸福そのものを掴むことはできないからです。「幸福」という言葉を「人間」なり、「自由」なりにおきかえても同じように思われます。

人間なり、幸福そのものについて知らないままにその条件を探し求めることは、砂の上に家を建ててするようなものだと思います。かえて条件を知ったことによって、悪循環の中に入ってしまいうことです。社会改造をめざす教育運動の一つに「生活綴方運動」

がありますが、この運動が今日行き詰まっているといわれるのも、その根本的な原因はこんなところにあるように思われます。

考えてみると、このごろは、この条件主義が何と横行していることでしょう。子どもたちが、こういう考え方で教育されるとすると、どういう事になるのでしょうか。ドライな味わいのない人間、条件に機械的に反応する人間になってしまっているのではないかと思われます。

「あしかび」から受けた僕たちの感動というのは、幸福とか、人間の条件ではなくて、幸福そのもの、人間そのものについて書かれていることから受ける感動であったことに気づきます。事実そのものもつが僕たちを感動させ、反省させてくれるのでしよう。和田先生方の十年、二十年の教育の現場での御苦労が、親念的でない血の通った言葉を生み出されたのでしよう。

この道を「人間教育」というならば、今日ほど、「人間教育」が強調されなければならぬ時はないよう

に思われます。僕たちは「あしかび」から受けるこの感動を一人でも多くの人に分かなければと思うところでもあります。

### 十字町便り——谷津の谷間の灯影

中里史子

私が最初にはじめ塾の建物を見たのは夕方でした。新しい建物の、どの窓からも、明るい灯影が流れていました。まるで谷津の底地から、背のびをして、胸を張って、夢と希望を胸一杯抱いた少年のように健気でイキイキとみえました。ひとりでに涙がこぼれました。

「よかったですね、先生」

思わずひとりごとを言いました。この建物は、先生の誠実で素朴な生活、正直で純粋な魂、こどもへの深い愛情、教育への熱情——それらがえのない貴重なものを、よしとみて下さった、神様か仏様の

下されものとも言えます。

X

X

私共は、和田先生が名利を捨て、青少年の教育の為に、純粋な気持で努力を続けて来られた姿を、長い間みて来ました。先生はよく塾への素晴らしい夢をいろいろ語りながら、

「——そうなるといいんだがなあ」

と首をかしげるようにして、少年のように人なつこい、影のない声をたてて笑います。その度に一日も早く先生のその夢を実現させてあげたいと思わずに居られませんでした。

ああ誰かこんな立派なお仕事の為に、お金をボンと投げ出して、「思う存分やってごらんさい」というお金持が居ないものかしら、とつくづく思われるのでした。

然し先生は決して無理をなさいません。時にはみていて、歯がゆく、じれったい思いを押さえ切れない時もありましたが、先生は、自分の立場や、健康や周囲の情勢など、じっくり考えて、じっと耐えて

こられました。社会情勢がどんなに移り変わろうと、  
変わらないのは、先生の教育への熱情、こどもへの  
愛情でした。数々の人間的苦悩を経て、先生の本来  
の持味である暖かい、親しみのある、人なつこい人  
柄は、ますます深味と幅を加えて来ました。

先生を知らない町の人に、

「あの坊さんのような人は誰？」とよく聞かれます。  
今どき珍しい男の人の和服姿も、坊さんらしい印象  
を与えますが、同時に先生の風采が、知らない人達  
にも、坊さんらしい精神的な何かを与えるのでしよ  
う。いつもほほえましく思い出すのは、久野の東泉  
院の書院に坐って居る時の先生の姿です。若い就職  
の岸さんより、ずっと和尚さんらしく、板についた  
感じでした。

X

X

先生のよい志、素晴らしい教育理想を実現するに  
は、どうしても誠意と実行力のある、よい助手や協  
力者が必要でした。先生の人柄が、物事に体当たり  
でぶつかって、強引に道を切り拓いて行くには向き

ません。長い準備時代が過ぎました。月日が流れ、  
その間に何人かの若い人達が、先生の周囲で育って  
行き、そして力を協あわせて、先生の志を実現する為に  
動き出しました。その人達はそれぞれ違った立場で、  
違った仕事についていますが、皆心から先生を愛し、  
尊敬して、なんとか先生の夢を一日も早く実現する  
御手伝をしたいと思っっている点は共通でした。先生  
のお弟子である若い人達の働きかけに、あちらこち  
らの人達が、喜んで応じました。皆その日を待つて  
いたからです。

そしてどうとう今のはじめ塾が出来上がりました。  
多くの人達の、先生への信頼と好意の結晶です。形  
は小さくても、眼に見えない強い友情の支えがあり  
ます。

こんなに皆の気持を動かしたのは、お金や権力で  
なく、長い間誠実に、よい志を保ち続けて、生き抜  
いて来られた、先生の生活そのものです。実に嬉し  
いことです。今のような激しい世の片隅に、こんな  
善意の人々の集まりがあるのは、まるで人知れぬ谷

間に咲いた白百合の花のように思えます。

一人一人の力は僅かであっても、皆が力を協せれば、随分大きい仕事も出来るものだという、何よりの生きた証拠です。この仕事に少しでも協力できた人達も皆実にいい気持です。

先生がいつも丈夫で、元気で、はじめ塾にこども達が溢れ、光りが一杯輝いているようでありたいものです。

## 記念祭

この日のために、はるばると山形から出て来たコトちゃんが、カマボコの土産物さえ持たせられず、それでも満足した顔で、先刻帰って行った。

これで記念祭は終わった。十日の晩、子ども連れの中山さん一家の到着で事実上はじまった記念祭は、今日(十三日)コトちゃんの帰郷で終止符が打たれたわけである。

たのしかった。

そのときは何がなんだかわからなかったが、過ぎてからしみじみとたのしくなる奇妙なたのしさである。だから、たのしかったのではなく、実は今、たのしいのである。

今、私は階下の書斎にいる。みんな出て行ってしまったこの家には誰もいない。窓の外で風鈴が鳴っている。

それなのに、あの八十人の人々のいのちの温かみが今でもこの家の中に波打っている。生まれて半年もたない赤ちゃんから五十歳の大人まで、その間のあらゆる年齢の男女がそれぞれに処を得て、此処こゝのあらゆる部屋々々に。

どこかの部屋の坐ぶとんの上に、赤ん坊が斜めに寝かされている。久紀ちゃんと昌子ちゃんの二歳の二人手をつないで物干台への高い階段を登って行く。少し大きい子たちが群れをなして二階から駈け降りてきて、今にも向かいのピアノの部屋に殺到しそ

な気がする。

あの日のことが、こんなたのしい幻覚となって、この家の中に生きている。

子どもをつれて来てくれた人たちに、私は特別な感謝を表明しなければならぬ。

当日の呼びものは、塾生の大演説会である。

「火星旅行報告演説」(重宏)、「宇宙旅行について」(浩)、

「民主主義について」(一夫)。司会は伸彦君。(俊介君はせっかく用意した演説の草稿が紛失して惜しくも棄権)。

さすがに大演説会の名にふさわしく、東西の冷たい戦争あり、わが国政界の腐敗を衝くあり、全学連批判あり、まことに堂々、また、奇奇怪怪。

発表外の余興として、「はじめ塾、ダークダックス」

(男子五人)と「ホワイトダックス」(女子六人)の合唱あり。ダークダックスの歌声の如きは、わが鼓膜の健全を疑わせるに足る威力を具えていた。ニーと、オーシーと、ミンミンと、カナカナの合唱

を聞く如し。

喫茶部「X」は大繁昌だったとみえ、純益? 五百余円をあげたそうである。さだめしみなさんの中にはだいたい被害者もありだったでしょうが、従業員一同の張り切った楽しい営業ぶりに免じて、お見

|          |   |      |
|----------|---|------|
| 果        | 物 |      |
| リンゴ      | — | 20 円 |
| ナシ       | — | 15 円 |
| ブドウ      | — | 15 円 |
| 飲        | 物 |      |
| ジュース     | — | 50 円 |
| サイダー     | — | 40 円 |
| お茶       | — | 3 円  |
| 今日のサービス  |   |      |
| 「水」「砂糖水」 |   |      |
| (2はいで5円) |   |      |

逃し下さい。そして来年もまたご愛顧のほどを従業員一同に代わりましてお願い申し上げます。

ご参考のため当日のメニューを掲げておきました。この定価ではもっと儲かるはずだが、従業員が飲んだり食へたりした分がよほど多かったに違いない。



特別に準備も計画もせず、ただなんとなく集まってもらったので、どういうことになるかと多少心配だったが、思い思いに気楽な姿勢で食べたり話したりして下さったので、まずまずよかった。ただ一つ残念だったのは私が皆さんに言わなければならぬ一番肝心なことを言い忘れたことである。――感謝のことはを余計なことをしゃべっているうちにすっかり忘れてしまったのだから、我ながら呆れたものである。仕方がないから、ここにあらためて書き記しておこう。

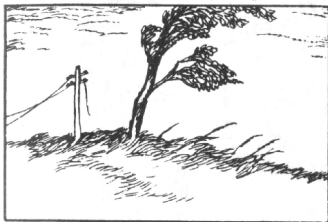
この一年間、華々しい成果を挙げることはできなかったにしても、ともかく、「はじめ塾」らしい活動にだんだん近づいてくることができましたことは、全く皆様の温かいお心に支えられたおかげだと深く感謝申し上げます。

どうぞ次の一年間もよろしくお願い申し上げます。

記念祭の最中に次の電報が届き、なんだか本格的な記念祭になったような気がして一段と楽しさを増した。

ジクケンセツキネンサイニアタリ ココロカラ  
オイワイモウシアゲルトトモニ ミナサマノゴド  
リヨクニフカクケイイヲヒヨウス コンゴマスマ  
スキジクノゴハツテンライノル

サカイチュウジロウ





15

発行人 はじめ塾 和田重正  
印刷人 大畑 喜美子  
昭和三十五年九月二十四日

日曜の話 九月十八日

## 白と黒

私は時々その少年院へ行きます。そして少年たちといろいろなことを話し合います。少年といっても、この少年院にいるのは、ほとんど十八歳か十九歳で、大抵はここへ来るまでには何度も警察の厄介になったり、他の少年院を廻ってきたような人たちで、何かのはずみで一度や二度悪いことをしてしまったというような人ではありません。いわば悪事が身にしてみてしまっているような人たちばかりです。ですからこの人たちは、ほとんど例外なしに、自分は悪人だとしんから思い込んでいます。そのはずでしょう。警察へ行っても鑑別所へ行っても、家庭裁判所へ行っても、どこへ行っても悪人として取

り扱われ、恐らくそんな子は、家庭でも、世間でも、学校でも、不良、つまり悪人だとして取り扱われてきたのでしょうから、自分は一並み外れた悪人だと思ふのは当然でしょう。実際その人たちの経歴を見ると、なんといい悪い奴だろう、と思わないでいられないような悪事を重ねてきています。

しかし、この人たちは本当に悪人なのでしょうか。私にはどうしても思えません。それと反対に、親切で働き者で人のためになることばかり考えたり実行したりする人は本当に善人なのでしょうか。私にはどうも思えないのです。——こう言うと誤解があるでしょうから言い直しますが——この人は悪人この人は善人というように、悪人とか善人とかきまつている人はないというのです。はっきり言うと、その人だけを取り出して見て、これは悪人とか善人とか言える人はいません。みんな善人でも悪人でもないただの人間です。フライデーの来るまでのロビンソン・クルーソーみたいに全く一人で生きている人は、何をしようと、悪人でもなければ善人でもありません。

では、善人とか悪人とかいうのは、何のことでしようか。それは他の人との関係で善悪が生ずるので。土人のフライデーが現われてロビンソンは親切な思いやりのある善い人になったのです。では、ロビンソンは善人だったのではないかと言われるかも知れません。それは一応そうなんですが、私はこんなふうに考えています。

だいたい人間は誰でも半白半黒なものであって、どんな人でも全白だの全黒あるいはそれに近いような人はないと思います。どんな立派な人でもどんな悪党でも、その点は同じだと思います。ただ善い人とそうでない人との差は、他の人に対するとき、自分の白の面で接するか黒の面で接するかの違いがあるだけだと思うのです。私なら私という人間は、全く一人ぼっちで月世界にいるならば、白でも黒でも何でもありませんが、人間界の中に入ると同時に、半白半黒になります。そして他の人に対するとき、どれだけ白い面を出すかによって善人の程度がきまるわけです。ロビンソンについて言えば、一人ぼっ

ちで暮らしていた二十年間は無色（善人でも悪人でもない）だったが、フライデーが来ると同時に半白半黒になった、そして彼はフライデーに対してはいつも白い面で接していた、ということになるのだと思います。

ですから世の中でいわゆる善人というのは、白の面を表に出して人に接することが比較的多く、悪い人とは、黒い面を多く出している人のことだと言えます。そこで、今朝みんなに聞いてもらいたい一番大事なことになるのですが、人間は半白半黒の球のようなもので、二人の人の間では白と白とは引き合いい、黒と黒とが引き合うというようにできています。だから、こちらが白を出していると相手も白で対してくる。また、向こうが黒でくるとこちらも黒になる。これが最も自然な状態での法則です。

だから、他の人に対して白で接するクセの人のぐりには、みんな白の面を見せて寄ってくる。そこに平和な助け合いの明るいグループが出現する。その反対の場合、即ち欲張り、憎しみ、疑い、不正直、

薄情、不安（それをみんなひっくるめて、はじめ塾ではケチな根性という）、そんな暗い面でも世の中に対しては、やはり、そういう暗い心を表にあらわした油断もすきもならない人間が寄ってくることになりませう。

アメリカとソ連の首脳部、そのどっちかにくっついてマゴマゴしている各国の政治家、こういう真っ黒けな集団によって人類は支配されています。こんな連中は、口では人類のためとかなんとかうまいことを言っても、黒の面で、いやが上にも黒を濃くして対立している実にくだらけな人間どもです。相手の行為とか誠意とかを少しでも信じたら、その瞬間に自分の足元の火山が爆発するだろうと信じて戦々恐々としている地獄の生き物です。

それはさておき、われわれ個人がどうせ生きて過ごす一生なら、どっちの方が得ということぐらい誰でもわかるはずですよ。

それでは、白を表にしようか、黒を表にしようか、それは自分の自由になるものなのだろうか、という

疑問が起こるでしょう。それに対して私は、はっきりと「できる」と断言します。

世の中で「あいつは悪い奴だ」と言われるような、例えばさっき言った少年院の少年のようなものは、自分は悪い人間だ、黒なんだと思ひ込んでいて、われわれが白い面と接して行っても、頑強に黒を引っ込めません。自分の心の回転を自然の状態に置かず、その回転にわざと抵抗を与えているのです。

また普通の世間にも「人が善くっては生きて行かない」と思ひ込んでいて、一生懸命、黒を表に出すことに努力している人があります。わざと図々しくしたり、人の悪いこと、薄情なこと、欲張りなことなどをして相手を負かし、自分が利益を得ようとする人があります。こういう人は相手の白に応じて回転しようとする自分の心に、意思の力でブレーキをかけているのです。みんなにも思ひ当たるところがあるでしょう。お母さんやお友だちが、一生懸命がまんして白で向かってきてくれる（親切に、ごきげんをとってくれる）のに、それに負けてはくやし

いと思って、わざとすねてみるということ、こんなことはみんなの年頃にはよくあることです。

このように自分を黒くしておくために努力すれば、相当な程度に頑張ることができますが、それと同様、相手が黒でやってきて、こちら黒を出したくなる場合でも、意思の力でその回転にブレーキをかけて、じっとこらえることもできます。そして黒の頑張りど、白の頑張りど、どちらかねばり通した方が勝つて、相手を自分の色と同じ色に変えることができます。よく世の中には、根性が曲がりきってどうにもならないならずもの、をどこまでも温かい真心で扱ってやって、ついに改心させた、などという話がありますが、こういうのは白がついに勝つた例です。その反対に、ついに黒に征服された、という場合もたくさんあります。

私はまだまだ、誰に対しても、どんな場合にも白を保ちつつつけられるほど徹底した意思力を得ていないので、時々くだらないことで黒を出してしまいますが、それでも、私がこんなことに気がついて、

本当に幸福な一生を過ごすために、できるだけ白を表に出して生きましよう、と決心してから約三十年になります。今になってみると、特別に「俺は黒で生きる」と強い決心をかためているごく少数の人以外は、自分のぐるりにいる人々はみんな、私に白い面を見せてつき合っていてくれます。善意と好意とまごころに包まれている自分を発見するのです。

自然の状態では、相手次第で白になり黒に変わるものですが、その状態から一歩進んで、黒に対して抵抗力のある意思力を養っていかねばなりません。それには、いつも「三つのかぎ」を心にかけていることが一番大切ですが、なんぞを続けてやっているのと大へん助けになります。

### 綴り方

#### 「これでいいんだ」

有史以来の大豊作といわれる稲穂がずっしりと稔

りつついて、その畦道あぜみちには目のさめるような曼珠沙華があちこにかたまり咲いている。秋はとくにはじまっていたのだ。久野へ行く川沿いの桜並木の下をゆっくりとペダル踏みながら満ち足りた心で深々と思った。

「これでいいんだ、流れの中のあの石と同じ。これ

でいいんだ」  
つまり、私は現実を見ようとしない夢想家だったのだ。箸で一口一口飯を食い、本を一字一字拾って読むようなそんな飛躍のない生活はあまりに馬鹿げている、何か全生命を叩き込んで、あたり一面、一時にパッと金色に照り輝かせるといったような素晴らしいことがあるような気がする、私は青年時代から最近までそんな夢想にとりつかれてきたようだ。

学生時代には、学校の中の試験には全く身が入らず落第さえしなければいいと思っていた。その代わり、入学試験となると素晴らしいファイトが出て楽しくて楽しくてしようがなかったものだ。大学を卒業したとき、友人が銀行に入ったり、行政官や司法

官になったのを見て、どんな気持ちであんなところに勤めることができるのだろうかと不思議でならなかった。

就職がきまるとみんなニコニコする、そして友だちもおめでどうと言わらわしになっている。だが私にはどうしてもそれがわからない。月給七十五円はいいとして、まことにたわいもない動作を毎日繰り返し、何の創造も許されないサラリーマンの生活など、懲役とどこに違いがあるのだろうか。そんな終身懲役になるくらいならむしろ死刑の方がましだ。このようにしか考えられない私には、如何に無理をしても、「おめでどう」という気にはなれなかった。

それほどであるから、自分がサラリーマンになるなごどということは考えようもないことだった。せっかく姉が骨を折って、山本留次さん、五島慶太さん、渡辺鍬蔵さんに直接頼んで、無理矢理に就職させられた日本フェルトという会社、目蒲電鉄、東京商工会議所のいずれへもついに一日も出勤せず、姉をさんざん困らせたものである。

そうしておいて、自分はどんなえらいことをした

のдарう。それから三十年間、私は一体何を考え、何をしてきたのдарう。「人生の第一義は何であるか」（こんなことばで考えたわけではないが、要するにそういうことである）。それを十七歳のときからつい数年前まで一途に考えて来たのである。そして一方、今に何か素晴らしいことをするときがめぐり来るのдарう。それが、何時、どんな形で来るかは予期できないが、ともかく裏の山から千カラットのダイヤを掘り出すような、柄は小さくとも人々を驚嘆せしめるに足る何事かが為されるときが来る。こんなことを固く信じてきた。私の三十数年間の偽らざる事実である。

なるほど三十年近くも我武者羅に塾をやってきた。そして今振り返ってみれば、その時期にかなりな誠意をつくし、悔いのないことをしてきたように思う。しかし、どんな時期にも、そのときに「これいいんだ」と思っていたことはない。いつもいつも為すべきこと、実現さるべきことの千万分の一も行なわれたことはないと思ってきた。——ということとは、自分

の本当のすがたというものは、こんなみみずの如きみすばらしいものではない。これは自分の仮のすがたに過ぎないのである。今に時機到来すれば、本来の龍の姿を現わして……と。こういう現実を無視した夢の中に生きてきたのが自分である。

この間違いはどこから来たものだろうか。  
「朝起きて顔を洗い、掃除をし、新聞を読み、手紙を書き、読書し、雑用で街を走り廻り、生徒が来れば十年一日の如く、This is a pen and a pencil」といったような道ばたの砂利のような学問のカケラを繰り返し、暇を見つけては草花をいじる」こういった何の変哲もない日々の行動の一つ一つがいかにもたわいもない仕業のように感じられ、今に、これらに代わってもっと価値ある何かによって一日が満たされるようになる、そうならなければならないと感じていたのである。その「もっと価値ある何か」とは具体的にどんなことという目あてはなく、ただ人生の意義に直接関連のある何か、といったぐらいの漠然としたものだった。

五十に近くなつて、私は、はじめて自分の間違いに気づきはじめていたのであった。朝、顔を洗い、子どもに *Thi s i s o pen* を教え、草花をいじることがどんなにたわいもない仕業のように感じられることでも、この他の何事に人生があるだろう、と。

サラリーマンでも商人でも医者でも教師でも日常一つ一つの動作は一見まことにたわいもないことに違いない。先生がチョークを持って教壇に立つても、医者が聴診器をあてても、それで人類が救われるわけではない。それでは、そのたわいもないしわざの積重ねによつて何かが出てくるというのだろうか。

必ずしもそうとは言えない。多くのそれらのわざは時の流れと共に消え去つて、跡形もなくなるのが普通である。もし、われわれが行為の結果に人生の意義を関わらせようとするなら、恐らく、どんな業でもまことに空しいものと感ぜざるを得ないだろう。なぜなら、そのときの人生の意義とは必ず抽象化・観念化されたものであるはずだからである。しかし、妄想を除いて私情をさしはさまずに事実を直視すれば、

顔を洗ひ一箸一箸飯を口に運ぶより他に、どこに人生を求めることができよう。

一つ一つの動作の手元に足下にのみ、誇張もされず、卑下もされぬ眞実の人生があることに気づいたならば、その人生を貴ばないで、何を貴ぶべきものがあるだろうか。手元、足元に生きている唯一つの人生を顧みず、丘の向こうのバラ色の夕焼け空に思いを馳せるということが、十二歳の少年にふさわしい幼い夢であることに気づかなければならなかつたのである。

こう知つてみて、私ははじめて、銀行に就職し、役人になつて喜ぶ人々の正常な精神を理解することができたのである。日々責任を持つて為すべき仕事を与えられること自体が喜びであるはずだ。

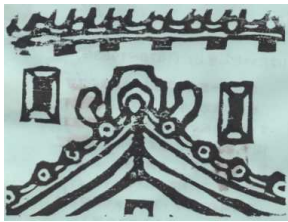
ともかく私は、普通の人より三十年もおくれたけれども、生きている間にこのことを知り得て、足元のたわいもない些事・俗事に全力を傾けて悔いのないことを正しく知り得たのは幸いであつたと思つてゐる。



「これでいいんだ。川の中の石と同じ」

「不問収穫、只問耕耘」

これは支那の浙江農業大学の学長、馬先生が、昭和十年頃日本へ来られたとき、自分のモットーであると言って示されたものである。私はこれを聞いて、当時、非常に感動し、以来二十数年間、「不問収穫」を懐中深く温めてきて、ようやくこのほどものにしたところである。



弘前城 刻・村木義一



16

発行人 はじめ塾 和田重正  
印刷人 大畑 喜美子  
昭和三十五年十月三日

日曜の話 九月二十五日

## 美しい心

そこの階段を上がったところに「美しい心」という字がかかっている。あれは中村京子さんという小学四年の女の子が書いたもので、実にのびのびとした気持のよい字です。子どもらしい、いのちの単純さが思い切り廻っているように感じられて、とても楽しいので、ばくく借りてかけてあるのです。

その字のよさの他に、文句も大へん気に入ったので、今朝はそれについて少し話そうと思います。

私は昔からこんなことを考えています。――

この世界には何か「美しさ」というようなものが、  
丁度、空気中の酸素のように、どこにもかそこにも、

いっぱい溶け込んで流れている。それが、すべての物ができるとき、形や色や光沢つやとなって現われてくるような気がするのです。そして、その「美しさ」が一番わかりやすい相（すがた）で現われたのが、いろいろな花だと思ふのです。美しさはどんな物にもそなわっているけれども、特に花の美しさは子どもにもわかる美しさでしょう。雑木や枯野や石ころの美しさとなるとさうはいきません。

では、花の種類によって美しさが違ふでしょうか。私は美しさの種類は違ふが、どっちの方が余計美しい（more beauti ful）とは言えないと思つています。バラと桔梗ききょうとどっちが美しいか、牡丹ぼたんと藤とどっちが美しいか、と言つと、人々によって好きす不喜欢ずはあつても、美しさの比較はできないような気がするます。春早く咲くいぬのぶりのような小さな花でも、よくよく見れば、豪華な洋蘭より美しさが少ないとは言えないでしょう。私にはどれもこれもみんな満点だと思ふのです。（このことは他のものの美しさについても同様なわけですが、今はそのことにはふ

れないで花だけについて考えます）。

しかし、どんな花でも美しさを満点に發揮しているというのではなく、それは、栄養がよくて十分生き活きしている場合だけです。肥料や日光や水が足りなくて育ちそごなつた花は、お気の毒ながらあまり美しくありません。なんといつても健康な美しさでなければ、無条件の美しさとは言えないでしょう。

さて、そこで人間の心の美しさはどうかというと、花にいろいろな種類の美しさがあるのと同様、美しさの種類は多種多様です。そして人間の心の美しさも花の美しさと同じく、世界に満ち満ちている「美しさの流れ」から出たものですから、もとは同じであるし、現われ方もよく似ている。だから人の心（心は言葉や動作、顔かたち、服装などに現われる）をよく味わってみると、梅に似た人、桜のような人、真赤なダリヤ、ぼたん、あじさい、水仙、がんび、罌仙花、どくだみ、たんぽぽ、菊、福寿草、といろんな人がいます。

みんな気をつけて見てごらん。きつとなるほどと

思うことがあるでしょう。

でも、人間の方は、花ほどに美しさがわかりやすいくない。また、実際に花ほどに美しさが發揮されていない場合が多いようです。それは、人間には花の場合と違って複雑な文化的環境というものがあって、その影響で心が病的になりやすいというのが原因の一つでしょう。花の美しさが十分發揮されるのには健全であることが必要なのと同じく、人間の心の本当の美しさも、それが健康でなければ出てきません。神経衰弱やヒステリー、精神薄弱、狂気、あるいは、むやみに自分を犠牲にしている気分になったり、へんな理屈をつけて苦痛をよるこんだりするような病的なもの、肥料負けや肥料不足だったり、虫に害されたり、日光や水が足りなかったり多過ぎたりした花と同じように、美しさが非常に害われています。ジメジメ、メソメソ、ヒョロヒョロといった青白い病的な心や、調子はずれに働く心が美しく見えることもありますが、それは歪められた美しさで、本来の美しさそのものではありません。ところが今日、

案外そういう歪められた不健康な美しさの方がもてはやされるのは、環境の刺激が強過ぎて、多くの人が多かれ少なかれ不健全な精神状態になっているからだと思います。

それから、もう一つ人間の心の美しさを害う大きな原因は、エゴイズム(利己主義)です。

花にはエゴイズムはありませんが、人間にはそういう奇態なものがあって、それが人間の心を汚し、醜くします。その点、花より人間の方が不利です。

「あの人は心の美しい人だ」とか「私は美しい心を持ちたい」というときの美しい、というのは、ほとんどエゴイステック (egoistic 利己的) でないという意味に使われています。つまり、美しい心とは「我を忘れた心」のことを言います。例えば報いを求めぬ親切をする心のようなものです。エゴイズムというのはそれと反対で、なんでも「おれが」「わたしが」と我を突き出してくることで、例えば、人の迷惑を顧みず自分の利益ばかり図り、人に勝つために不正な手段で相手を傷つけたり、自分の感情をな

だめるために人を苦しめたり、あるいは実力以上に人に認められたくて、むやみに出しゃばったり。こういうのがエゴイズムの現われで、はじめ塾でいうケチな根性、とだいたい同じです。

人間にはみんな大なり小なりこういう根性があるて、せっかくの美しい心を自らきたなくしています。

全く惜しいことです。人間にとつて美しい心ほど貴いものはありません。どんな大切な宝物よりどんなにたくさんのお金より、美しい心ほど貴重なものはありません。——こんなことは人間である以上誰でも知っているはずですが。しかし境遇がわるく、頭もわるくて、美しい心よりお金や地位の方が貴いと思つている人も時々ありますが、そういう人だつて、頭を冷やして正気にかえれば、美しい心の方がどんなに貴重かということに気がつきます。

それでは、どうして人間は、そんなに貴い美しい心をわざわざエゴイズムできたなく汚さないでいられないのでしょうか。それは一言でいえば愚か（バカ）だからです。ものの道理やものの値打が本当にはわか

らないで、丁度おしゃれをしようと思つて顔にドロやす、を塗るようなことをしてしまつのです。

では、どうしたら愚かさから脱れることができるでしょうか。それには、まず頭を冷やして、ノボセを治し、丸いものは丸く、△は△に、赤いものは赤く、青は青に見えるようにしなければなりません。

われわ人間は、知能という高級なレンズを持つていて、すべての物言をこれを通して見るので、もしそのレンズに歪ひずみがあつたり色がついていると、ものが正しく見えなくなります。ところが、人間は大い、大なり小なり歪みや色を持つているものです。つまり、我々は高級な知能を持つていながら、物事を正しく知ることができない愚かさに陥つていっているわけです。

この歪みや色は何によつて出来るのかというと、エゴイズム（ケチな根性）です、そのエゴイズムを取り除いて、物事を正しく観て、美しい心の貴さを知り、自分の心を美しくするのにはどうしたらよいかと言えば、なんその法こそが最上の道であります。

今日は城山その他、多くの学校が運動会なので、出席者は三人しかいませんが、こんなことはデモやストと違って大勢の力でやっつけることではなく、一人でも半分でも落ち着いてやればいいのです。

さて、キッチンと坐って……。

## 盤珪さんの「不生」

戦争初期の昭和十七年の夏のことである。東京から訪ねて来た大学生が、岩波文庫の小冊子を置き忘れて帰った。寝転んだまま手を伸ばして床の間の上にあるその文庫本を取り上げた私は、何気なくペー지를めくっていた。

「不生で座れ」「?」「不生は仏心・仏心は不生」「!?!」

「仏心は不生にして靈明なるものと極りましたわいの」「!?!」

押し寄せる山のような土用波を次々と頭からかぶっているように、立ち直る隙もなく不生の圧力に叩

かれて、息を吐くこともできなかった。

「不生で一切事はとどのう」「!?!」

私は文字通り身ぶるいして坐り直した。

このとき私は、はじめていのちの座を得たと思っただ。生きる道を知ったのである。

そのとき私は、不生とは何であるか、などとは考えもしなかった。今も考えない。考えたらわからない。しかし私には、森田正馬先生から与えられた「事實唯真」「ありのまま」という言葉があった。丁度十年間、求道に命をすり減らしている間中、夢にも忘れずこれを温めていたその功德によって、不生を不生として、私は盤珪さんをわが血脈の人と感ずることができるようになったのだと思っっている。

私からもし、少しでも人間らしいよき知恵が出ることがあるとしたら、それは、ことごとく源を森田先生と盤珪禪師に発していることをこの機会に告白しておこう。



# まみず

昭和四十九年 三月号

白杖 38

## 見える

みんな

なにかを探しています

主義や主張にとらわれないで

人生の土台になるようなものを

そんな

なにかを

みつけてもらいたいと

ねがう人たちによって

この『まみず』は作られています

Sさんは大変な発見をした。自分がなんとなく落ちつかないのは比較の中で生きているからだ、と。他人に比べ、未来を推量して現在の現実には全身の重みをかけていないからだ。これに気がついてSさんの見える景色が変わってしまった。よく見える。山も谷も、近道も廻り道も、邪魔者も何でもよく見えるようになった。オタマジャクシはオタマジャクシでいいのだ。ドジョウやハヤを見て羨むことも羞ずかしかることもない。オタマはオタマを懸命に生きればいい。そのうち蛙になるだろう。そして蛙になったら蛙でいい。鰻や鯉やワニと比べることはない。蛙が蛙を懸命に生きればいい。ウロウロすることはないのだ。

## 収穫を問わず

和田 重正

(小田原はじめ塾)

よいことばを生活で味わうこと  
はよいことです。  
しゆうかくをどわす ただこううんをどわす

「不問 収穫 只問 耕耘」

「収穫は問題ではない、ただ耕す  
ことだけが問題なのだ」

という意味ですが、これは昭和の  
初め頃ある歸人雜誌に、中国浙江  
省の農科大学の学長さんのことば  
として載っていたものです。当時  
人生の問題に劇しい苦悩を続けて  
いた私は、これを見たとき非常に  
強い感動を覚えました。それから  
三十数年間はこのことばをずっ

と心の奥に温めてきました。愚鈍  
で強情な私にとっては、このこと  
ばの真意を生活の上に実現するの  
には長い年月を要しました。しか  
しそれだけにこのことばはまこと  
に貴重なものと思われるの  
です。

私は戦前戦後を通じて三十余年  
間、十代の少年少女を相手に寺小  
屋のような私塾を営んできた者で  
すが、生涯をこの日当たりのわる  
い仕事に打ち込むうとしたのは、  
むろん一つの念願があったため  
です。その念願とは、簡単にいえば、  
教育の一つの眼目として「自覚」  
の開発を加えるということでした。  
その意味をいま詳述する余裕のな  
いのは残念ですが、要するに私は  
人間の教育には文化を創造し継承

する力(文化能力)の開発と、自  
己を知る力(自覚能力)を開発す  
る努力と二つの面が具わらなけれ  
ばならないと信ずるのです。とこ  
ろが学校教育はもっぱら文化能力  
の開発にのみ没頭し、自覚開発の  
方は全く忘れ去っていることは周  
知の通りであります。恐らく、自  
覚開発は宗教家の仕事で教育の領  
域ではないと考えられているのだ  
と思えますが、これが現代に生き  
る個人の苦悩と社会の混乱を益々  
助長する根本原因になっているの  
だと思っております。それで私はその  
自覚の道を自らも求めつつ、若い  
人々の実生活に即して彼等の自覚  
を啓発しようと念願して、ささや  
かな私塾をやってきました。

このようなわけで、私の塾は殊

更に大学者・大政治家など、いわゆる大人物を作るのを目的とはせず、むろん当節流行の受験勉強塾でもありません。したがって、この塾をやることによって私自身が有名になったり、お金が儲かったりするおそれは全くありません。

このことを初めから十分承知していた私は、自分は「収穫を問うてはいないのだ」と確信していました。ところが不思議なことに、あのことを意識する度に何か不安が浮かんできくるのです。それは、点数や統計として成果を確認することのできない自分の仕事の性質からくること、つまり「これがどれだけ人の役に立っているのだろうか」ということについての不安であるとかわかったのは、かなり後

のことでした。大海の魚にひと握りのわが命の糧を投じているような心許なきだったのです。

ここで私は「収穫」とは自分が受ける酬いのことばかりでなく、わが働きによる稔みのり、つまり成績のことであると気付きました。しかし稔の多寡を自ら量る愚かさから完全に解放されるまでには更にかんりの年月を要したことでした。がともかく自己評価のソロバンを手放し、ただ縁に随ってひたすら耕すことができるようになったことは、大きな人生の悦びでした。さて考えてみると、世の中には己れの働きの価値について、昔の私と同じような不安を感じ、更に空しさに悩んでいる人が案外少なくなっているのではないかと思います。

名利を追い、文化生活を自あてに泣き笑いすることが人生のすべてだと心得ている人は別ですが、人間としての現実の生き甲斐を深く追求しないではいられない人は職業と仕事の如何を問わずこの不安に悩まされるのではないのでしょうか。

その人々、ことにそれらの若い人々に中国大人のこの一句を呈したいと思います。もしこれを首尾よく消化しきることができたならば、その人は現代社会の巨大なメカニズムの中に没し、無意味な繰返しの如くに見える日々の働きの中にも、時空を超えて生きると自己を見失わず、活き活きとした創造性を發揮して遂に倦むことを知らないであろうと思います。

目下の需もとよに応じて最善を尽く



す、これが「ヨイことはする」の  
実践であり、人生最高の道である  
と信じます。

西 湘 まみず 会

通 信

第十号

昭和五十年十月

## 人生観への道

四・五十年昔の若者と今日の若  
者と異なっていることの一つとし  
て、人生についての味わい方の深  
さを挙げる事ができると思いま  
す。戦後三十年間の変化は我々昔  
の青年をして長嘆息せしめるに足  
るものがあります。老人を嘆かせ

るくらいは問題ではありませんが、  
人生についてももう少し深い理解を  
持たなければ、この人たちはただ  
の空しい泣き笑いの一生を過す  
ことになるだろうと思つて、余計  
なお節介ながら、黙つて見ていら  
れない気がするのです。

人生の味わい、と言つても「人  
生とは何ぞや」とか「人間如何に生  
くべきや」などと大上段に振りか  
ぶつたような問題を初めから考え  
よう、というのではないのです。  
いざれ行く行くはそのような大づ  
かみな、いわゆる人生観の問題に  
達するでしょうが、いま差し当た  
りはそのような概括的なことにな  
く、われわれが生きていく上で遭  
遇する問題の一つ一つについて、  
もう少し深く考へる習慣をつけて

もらいたいと思つのです。どころ  
がいまの青少年の生活には、その  
ような問題について深く考へ、味  
わう構合が与えられていないので  
はありませんか。何かよいキッカ  
ケを与えなければ彼らは空しく青  
少年時代を経過して、悪くすれば  
生涯を目先の利害得失に振り回さ  
れて、スルメの表面についた塩を  
なめたような生涯を送つてしま  
うかもしれません。

自分の過去をふり返つてみると、  
小学生の時分にすでに大きな疑問  
をもっていたようです。例えば「ど  
うして大人は自分勝手になんでも  
できるのに、子どもは許されない  
のだろう」とか「どうしてウソを  
ついてはいけないのだろう。ウソ  
をつく方がトクになることがある。

いけなくてもトクになる方がトクだから……」など考えていたようです。しかしそれは極めて漠然としたもので、考えたというより、気がしていた、という方が正しいかも知れません。

ところが中学生になると心に浮かんでくる疑問はもっとハッキリとした形をとり、内容も堂々たる人生問題でした。中学一・二・三年の間に私の心に強く浮かんできた問題は結局自分の一生の課題となりました。例えば「この時に、この国に生まれ、この親の子となり、この兄妹の弟となつてこの自分はどこから来たのだろう。何によってこういうことになつてゐるのだろう」とか、「大人が教えてくれる道徳は守る方が得なのか。

守らない方が自分には得になるのではないか」それから最大の疑問は、性<sup>セックス</sup>についてです。性の何が問題なのかは自分にもわからないうが、ともかく、性に関することは何から何まで強い興味と不安の種ならざるはなし、という状態でした。また「死んだらどうなるのだろう」ということも心のどこかでいつも問題になっていました。その他数え上げたらキリがないほどの疑問をもっていました。

それらの問題はかなりハッキリした形で意識していましたが、少年の私には、「これは子どもっぽい幼稚な疑問で大人にはわかり切ったことなのだろう」と思われたので、なるべくその疑問を避けて通らうとしたものでした。

この自分の経験を顧み、そして今の少年たちを見ると、彼等もやはり同じような問題を心のどこかに感じているに違いないと思われるのです。それを彼等もやはり「子どものクダラナイ疑問だ」と思つて見て見ぬふりをして通つているのだと思います。ただ我々の少年時代はベンキョウや点数などという怪物が今ほど猛威を奮つていなかったのです、心の底に湧いてきたそれらの問題を眺める精神的余裕がありました。しかし今日の少年たちにはそんな余裕はありません。これは人間の子にとつては決定的な不幸です。『自分を知る』という人間最大の特徴を放棄したことになるからです。

それはともかく、子どもも中学

生ぐらいになると人生の最も根本的なところにつながる奥深い問題になんとなく気づくのが普通のようです。それをそれぞれの性格と環境の差異によって、全く気にとめずに流し去ってしまったら、あるいはしばらくそれを眺め味わったりすることになるのだと思います。今日の子どもたちの置かれている環境は前者を作るのに最も適したもののようには思われず。つまり折角浮かんできた味わい深い問題から目をそらして浅はかな目の前の出来事に目も心も奪われて過ぎて行く、その結果はいつも不安とあせりに追われ我に帰ったとき底知れぬ虚しさに陥る、ということになりやすい環境だと思つてです。そこで我々親や教師は、子ど

もたちに虚しくない人生を送らせるためにどうしてやったらよいかということが問題になります。これは、どんな方法で尻をひっぱたいてやったら勉強するようになるか、という問題より遙かに重大な教育問題です。

「人生について考えなさいよ」などと言ってみてもはじまりません。私はやはり我々自身がこのことの重大性を理解し、子どもたちが感じていられるであろう問題について日常会話の中で触れていくのがよいのだと思います。こうした奥深い人生の問題は大人といえども徹底解決を得ているものではありません。もしかすると理解の程度は子どもとあまり違わないかもしれませんが、ですから我々が子どもに教

えるということはできません。こうではないか、ああではないか、と話し合うことができるだけだと思えます。そして、それでよいのだと思います。

それから、このような心の奥深くから生じてくる疑問は、数学の問題を解くように筋道を立てて解決に至るといった性質のことではありませんから、これに執拗く取りついていく必要はないということをよく心得ておくことは大切です。問題を捨てないように心のどこかにしまつて、宿題として温めていればそのうち熟して解決の芽が出てくるものだということをよく知っておかねばならないと思つてです。私はこのようなことを考えて、いつも塾の子たちに、人生を考え

る手がかりになるような問題を出  
しています。今月の「天のはたも  
その一つで、人間（自分）の価値  
ということについて広く深く考え  
てもらおうと思つて掲げたのです。  
「スマイレとタンポポとどちらの方  
が値打ちがあるかを考えてみよ  
う」（天のはた七）というのです。

小学校高学年以上のお子さんを  
お持ちのお父さんやお母さんがこ  
の問題についてお子さんと話し合  
つてみてくださったら、そのなか  
らいろいろなことがわかつてきて  
面白いと思います。

（和田）

発行所 足柄上郡大井町

瀬戸吉蔵方

西湘まみず会

## 後記

『あしかび』に、「依頼心の強い子  
の矯正は中学時代までに、また「子  
どもが『朝七時に起きる』と自ら  
決めたなら、起きるか起きないか  
の責任は一切子どもに移す」とあ  
り、親にとっては結構難しいこと  
でしょう。親が子どもにどんな人  
間に育つことを願っているか、さ  
らには、自分の家庭に「全体に通じ  
た目的とか信条があるか（垢抜け  
した家庭）」に関わっている一つと  
思いながら読みました。

不問収獲 只問耕耘

まみずの合宿でも、先生から思  
いを込めて語られたことを覚えて  
います。そのときに覚えたのか、  
別の機会に知ったのか記憶にあり  
ませんが、語呂もいせい何かかの  
折に蘇ってくることは一つです。

和田重正に学ぶ会機関誌『ここに帰る』 第85号

令和7年4月1日 発行

発行者 〒399-3301 長野県下伊那郡松川町上片桐1352  
和田重正に学ぶ会 平澤 正義

和田重正に学ぶ会ホームページ <http://wadashigemasa.com/>

和田重正に学ぶ会 会費は 年二千円 『ここに帰る』バックナンバー お分けします (有 料)  
◇◇ 当会活動資金へのご寄付 大歓迎 ◇◇